

『新撰役者穴のあな并ニ顔見世評判記』紹介

柏 崎 順 子

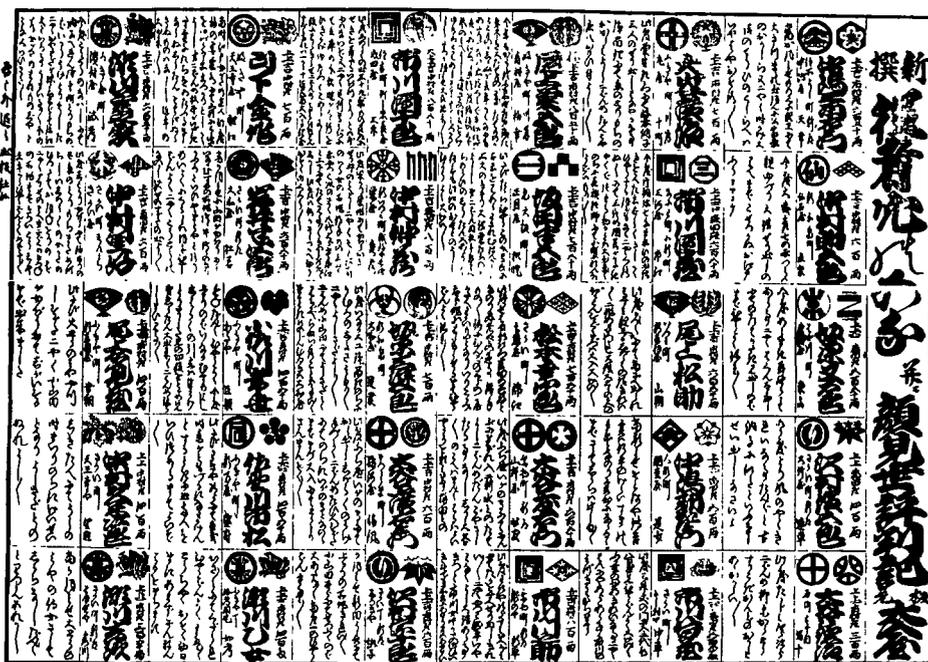
実践女子大学図書館所蔵『新撰役者穴のあな并ニ顔見世評判記』は、縦二十九種、横四十一・三種、いわゆる美濃判の一枚摺で、中村座十一名、市村座十一名、森田座八名、計三十名の役者をとりあげ、定紋、替紋、位付、出勤の小屋、給金、住所、屋号、俳名のほか、それぞれの役者に関する評判を記載した一種の役者評判記である。刊記はないが、内容から、安永八年に江戸の顔見せ芝居に出勤した役者の評判であることが判明する。

役者評判記は、京、大坂、江戸、三都の芝居の役者の評判を、土地ごとに三冊に分冊して刊行するのが通常の形態で、そのほかに江戸芝居の役者のみをとあげた冊子本の、いわゆる江戸評もあるが、この一枚摺の役者評判は、形態からいってもそれらとは明らかに性格を異にするものである。

この一枚摺が発行された安永八年の顔見せは、芝居界に内紛があり、座組、すなわち役者の配属が決まらず、役者付、すなわち顔見せ番付が発行された後も、座組をめぐる紛糾が続き、中村座、市村座はかろうじて例年通りの十一月朔日に幕をあげることができたのであるが、森田座は十一月三日に至ってようやく幕をあげるといふ始末になってしまった。この一枚摺は、そうした芝居界の内情をにおわせながら、ともかくも一件落着となったこの年の顔見せの評判をいち早く世間に知らせるために発行されたもの、すなわち一種の速報と考えられるのである。

芝居界の内紛とは、四世市川団十郎に格別に引き立てられて幅をきかせていた四世松本幸四郎と、四世団十郎の実子、五世市川団十郎との確執が、安永七年三月、四世団十郎の死去によって一挙に深まり、芝居界全体を巻き込んだ騒動に発展したことである。中村仲蔵の『秀鶴日記』⁽¹⁾は内紛の経緯を次のように伝えている。

(四世幸四郎は)折よければ我身を定めんと、一子高麗蔵をはかり事をもつて、今団十郎が養子となし、六代目に取立、我は団十郎が上座に付、芝居の座頭をつとめ、茶屋にて棧敷の割をなし、外に金子をこしらえて帳元も我手先の者を取立、中村十助が株の茶売も、金をかして質に取り、町内茶屋頭、座頭、帳元、中売までさまざまに取組、事既に調ひ、団十郎に遠回しに脇々よりいきどおりを拵へ、その身しめつする様に致し、帳元平次へは、我が弟分半四郎が娘を遣し縁を結び、万事かれとしめし合わせ、団十郎身寄の人々を座組にまで入置、平次うらがえりし体にて団十郎を突出し、来三月迄休ませ、その上にて誤ま



らせ、追善に事よせ、団十郎の名前を高麗蔵に譲り、海老蔵と改させ、一とあたまの上らぬ様に取組、ゆへに団十郎が妻お亀を去らせける。

幸四郎が団十郎の失脚を狙って種々画策したのが事の起りこりというのである。

両者の確執が続く安永七年七月頃、団十郎が、弟子の市川八百蔵の妻で、当時は後家となっていたおるやと通じているという噂が世上に広がった。仲蔵は、『秀鶴日記』に、この噂も幸四郎が団十郎を陥れるために、奸計をもって流したと伝えている。団十郎とおるやの関係は事実と考えられる⁽²⁾が、事がこじれたのは、幸四郎がこの事実をことさらに喧伝したことにあったのである。たまりかねた団十郎は、安永七年八月、とうとう舞台の上で幸四郎を弾劾するという事件をひきおこした。『秀鶴日記』によれば、噂が広がったのは幸四郎と岩井半四郎が謀ってのことと知った団十郎が、舞台上、幸四郎の悪事の数々を口上に詳しく述べたて、翌日は、ともに舞台に上がった半四郎に対して、「ヤイおたふく浅岡め、おのれが兄の民部めハ大悪人だとおれがいったといへ、おたふくめ」と罵ったという。この事件により、団十郎は中村座を退座することになった。『江戸芝居年代記』⁽³⁾に、次のように記されている。

当日日の出のひいき多き、団十郎、当八月中より堺町もめ合にて退座いたし、江戸中区々の取沙汰成所云々

団十郎のスキャンダルは世間を大いに騒がせたようである。この九月には風来山人の『飛んだ噂の評』という摺物まで出されているからである。

中村座を退座した団十郎は、この年十一月に、仲蔵の尽力で、森田座へ座頭として復帰したが、これ以後、幸四郎と団十郎の確執はさらに深まることになった。そのため、翌安永八年の顔見せの座組は、両者の確執に、役者、帳元、金主等、それぞれのおもわくが絡み合っ

て紛糾し、芝居界は大混乱に陥ったのである。

例えば八百蔵を襲名した沢村四郎五郎の処遇をめぐる紛糾を、『秀鶴日記』は次のように記している。

一 沢村四郎五郎、八百蔵と改名致し、三升世話にて中村座へ相済候所、門之助同座致しがたしとて、一年相休候心にて暇申出ける。又三津五郎は内々四郎五郎に意趣有人にて、これもむづかしく申候ゆへ、手附迄相済候へ共、四郎五郎にいとま出し申候四郎五郎、さすがに市村座へもかへられず内々にて半兵衛をたのみ申候よし、半兵衛も右のたくみあれば早速かゝへ申候所、三津五郎妻は勘弥縁有るゆへに四郎五郎はかゝへがたしと半兵衛申候ゆへに、仲蔵せひなく其訳もいわれずして中たがいにてわかれ申候、然るに此度かゝへ候事はさたなしゆへ、右之段帳元へ申遣し候所、ないない済候よし。殊には、宗十郎を逃し候云訳にかゝへ申候もの也。半兵衛はかゝへ候へ共仲蔵邪魔致し候など、四郎五郎へ申、顔見勢はきまりにて突出し申し候間、その心にて済申候やに申候。四郎五郎も去年の意趣あれば、とくしん致相済申候よし、此上は敵役一まいほしく候とて、内々候ゆへ、四郎五郎半兵衛相談にて、市村座の役者附にまで出候、中島勘左衛門をすすめこみて森田座へすませ申候。

役者付が発行された後に、市村座の役者付に載った中嶋勘左衛門を森田座が引き抜いたと仲蔵が伝えていることは、安永八年の市村座の役者付⁽⁴⁾の記載と、この一枚摺の記載とによって確認することができる。安永八年の顔見せは、このような内紛のために役者付とは相違する座組で幕を揚げることになったのである。内紛のしこりが芝居にどのように影響しているか、世間の関心がそこに集まったであろうことは想像にかたくない。この一枚摺は、それにこたえるために、三座の顔見せが出揃った段階で、主だった役者の実際の座組と、この年の顔見せの「あな」ともいうべき評判を速報したものと考えられる。

例えば、この一枚摺の坂田半五郎の評判に、「狂言も此仁のおせわのよしひようよく大けい大けい」とあるのは、『秀鶴日記』に仲蔵が伝えている、中村座の座頭に決まった団十郎と、幸四郎に加担した半四郎とを、半五郎がとりなして、半四郎の中村座出勤が決まった経緯をおわせたものと思われる。この年の顔見せの「あな」として江戸っ子の受けを狙った記事の一つといえよう。

ところで、この年安永八年十一月には、いわゆる江戸評『役者三舛美（かへりぎき）』一冊⁽⁵⁾（版元は中山清七）が出版されている。念のため内容を検討したところ、この一枚摺の記事は、大方が『役者三舛美』の記事と同文、ないしはそれに若干の改変をほどこしたものであることが判明した。例えば、『役者三舛美』には、団十郎と半四郎をとりなした坂田半五郎の働きについて、「狂言も杉暁丈のおせわのよしひやうよく大けい」と評判しているが、これは前に引用したくだん一枚摺の半五郎の評判とほぼ同文と認められる。また、仲蔵につ

いては、「このたびはあい口の三舛と引わかれていなりの御つとめ何やらさしつかへにて初日漸三日にはじまりざんねん御くろう」と評判しているが、くだん一枚摺には「しかし此度ハ何かさしつかへ初りおそく御くろう御くろう」と評判しており、後者は前者を要約したものと認められる。両者の記事の内容が酷似していることから、この一枚摺の版元は、『役者三舛美』と同じ中山清七であるらしく思われる。

では何故、このような酷似した内容をもつ評判記が相次いで同じ版元から発行されたのであろうか。その点に関しては、瀬川乙女の評判が手がかりになる。くだん一枚摺は、下り役者である瀬川乙女について、「ひさびさにて下られひやうばんよく重畳重畳とうちやくおそく初日まにあわずざんねんはるをまちます」と評判しているが、『役者三舛美』には、「とうちやくをそくて初日のまにあはずざんねんやうやう十一月日ひらよりの出勤なにはのげいこ此花ひやうばんよく路考子もさぞおうれしかろ」と評判している。一枚摺の記述は、その時点で乙女が江戸へ到着していた可能性はあるものの、「はるをまちます」といって舞台上の演技には全く触れていないのに対して、『役者三舛美』は乙女が出勤した後の舞台の演技に関して触れていることから、両者の発行は乙女出勤の前後に分かたれるのではないかと思われる。翌安永九年正月刊行の役者評判記『役者紫郎鼠』⁽⁶⁾によれば、乙女は十一月十日から市村座の舞台に立ったという。したがって、一枚摺の発行は十日以前、『役者三舛美』の発行は十日以後の可能性が高いと考えられる。印刷、製本に手間のかかる冊子仕立ての『役者三舛美』の発行に先んじて、そのダイジェスト版を急遽仕立てて、速報として発行したのがこの一枚摺『新撰役者穴のあな井=顔見世評判記』と考えられるのである。初日が出揃ったのが十一月三日。おそらくその翌日か翌々日には発行されたものなのであろう。

なお、この一枚摺に記載された位付は、安永八年の評判記『役者男紫花』の位付とも、安永九年の『役者紫郎鼠』の位付とも、また江戸評『役者三舛美』のそれとも相違していることを指摘しておく。

注

1. 所在不明のため原本未見。吉田暎二『歌舞伎絵の研究』（緑園書房 昭和三十八年刊）所収の翻刻により、一部、『歌舞伎年表』の記載をもって校訂し、引用した。
2. 武井協三「五代目団十郎のとんだ噂」（『歌舞伎一研究と批評2』 昭和六十三年刊所収）。
3. 国立国会図書館所蔵。
4. 東京大学文学部国文学研究所所蔵。
5. 早稲田大学演劇博物館所蔵。
6. 実践女子大学図書館所蔵。

[付録] 翻刻

新撰役者穴のあな井=顔見世評判記^板大入屋

上上^吉 市村座 六百五十両
(替紋)

中嶋三甫右衛門
(定紋)

住所よし町新道
中嶋屋 天幸

当かほミせもりくに親王にて」大さつまの出ほんに公家悪」のおかしら又ニやく時がけ大」
詰のてうひのこしらへハ」いやはやおそろ——

上上^窗 中村座 六百両
(替紋)

中村助五良
(定紋)

新和泉町
仙石屋 魚菜

今度大森彦七の赤つらハ」親ゆづり大詰せり出しの」見へまでこせつかぬお江戸」ふうヨヤ
ヨウ

上上^空 森田座 五百五十両
(替紋)

坂東又太良
(定紋)

はせ川町
東国屋 東山

今度あらまき耳四郎にて」あら事ニやくはくん太郎」にてのたてかたき見出しのば」までひ
やうよく珍重——

上上 森田座 四百両
(替紋)

沢村淀五良
(定紋)

さかい町新道
大竹屋 蓮車

今度より風のやくき」れいな事たん——と古」訥子に似たといふ事」せい出しなさいよ

上上 市村座 三百両
(替紋)

大谷徳治
(定紋)

石町卷丁目
馬十

此度たじミ四郎次郎」二ばんめ柳原かうとう」すりこぎおんどのおかしミ」あゝおかしい
——

上上吉 市村座 七百両
 (替紋) 大谷廣治
 (定紋) ふきや町川岸
 丸屋 十町

此度栗生左衛門にて路考訥子」三人のせり出しはなやかな事」浄留璃にて恋のとりもちの」
 おかしよし二ばんめだんこや」庄八おもひ付よし——

上上吉 森田座 六百五十両
 (替紋) 市川團藏
 (定紋) なにわ町北新町
 三河屋 市缸

今度片桐弥七なまゑひの出端」きをかへたしばらくさして」ひやうするほどもなく二やくく
 ろ」ぬしにて三代め團藏がかたき」やくでつまる物かとハ大出来——」のちに喜撰法師にて
 小町にれんほ」すごいもの——

上上吉 中村座 六百五十両
 (替紋) 尾上松助
 (定紋) いつミ町
 新音羽屋 山朝

此度久一にて当ざへ出られ」高すミ親王よりレばらくの請きれい」——二役あかまつよし大
 詰大とうの宮の」ぼうこんすごくまづハ大入大けい——

上上吉 森田座 五百両
 (替紋) 中嶋勘左衛門
 (定紋) 人形町
 函松屋 是少

当顔ミせそとはや傳吉」実ハ行平のけらいすまの」兵衛となのり実心にならるゝ」までさし
 てしうちハ中しま——

上上吉 森田座 五百五十両
 (替紋) 市川八百蔵
 (定紋) さかい町
 よし村や 中車

此度三升丈の門に入三代め」八百蔵先ひやうばんよく大けい——」ふか草の少将きれいな事
 ニやく」はんにや五郎あら事市川の」ミづきわたちます

樋上上吉 市村座 八百五十両

(替紋)

尾上菊五良

(定紋)

ふきや町川岸
音羽屋 梅幸

今年もかわらずふきや町座頭誠に「年久しき大たてももの^{わる}口^たてものか」よこものかしらぬが去年からなにも「あたりがない忠臣くらでなければ」夜があけぬ^{ひいき}此度備後の三郎」琴のミへよし上使さどの判官とかけ「ゆ左衛門と見あらわすまでしつかりと」よしまづかほミせ大入珍重——

上上吉 中村座 七百五十両

(替紋)

坂田半五良

(定紋)

元大坂町
正月屋 杉暁

此たびたゝらひやうこの介尊氏に「本名を見あらわされむねんからるゝ」所大のきまり大詰栗左衛門のミへ」よし第二ばん目杉本佐兵へ「ちもらひのしうたん大あたり——」狂言も此仁のおせわのよし」ひようよく大けい——

上上吉 市村座 七百五十両

(替紋)

松本幸四良

(定紋)

さかい町
高麗屋 錦江

此度長はま新左衛門吉田の兼好と」なりの路考丈との色事得手」もの——後にびんごの三郎の屋」かたへわかいものとなりいりこみ」太郎作にはらきらせるまでひやう」ばんよく珍重——

上上吉 市村座 六百五十両

(替紋)

大谷友右衛門

(定紋)

栗物町新道
山科屋 此友

此度ふぢべいがの守にてにん」ふにまぎれ入薪水とのたて」よし二ばんめだんごやさし」たる事なししかし大谷」——のこへまん——はるハよい」やくわりを頼みます桜田どの

上上吉 中村 六百両

(替紋)

市川門之助

(定紋)

栗物町新道
鶴のや 新車

此度わきや次郎すまへがミ」にてたかをすへせり出しきれい——二やくやつこ瀧平いや」ミなくよし大詰あら事」きつと市川女中かたの御ひい」き斗でも黒吉入あまり間ハあるまい

大上上吉 中村座 八百五十両
(替紋)

市川團十良
(定紋)

住吉町竹之丞長屋
成田屋 三升

此度しはらくの出三十九じやもの花道に「せきを居たるいぢつはりとハ外」にハないぞ又二やく足利尊うちに「て兵庫の介杉暁がこゝろを」ひきかげゆ左衛門と見あらわし」後にはらきらせ二ばんめ高とき亡こん」すぐきれい一から十迄大当大入イヨ親玉

上上吉 森田座 八百両
(替紋)

中村仲蔵
(定紋)

新いつミ町越後や長屋
栄屋 秀勲

此度柴かり栄作にて女ほうおなかと」せり出しのミへよし二やくそとは小町」のらう女の所作得手もの三やく」赤やつこ次のまく五代三郎にて市紅」と上下にてたて見事——きつと座頭——」しかし此度ハ何かさしつかへ初り」おそく御くろう——

上上吉 中村座 七百両
(替紋)

坂東三津五良
(定紋)

新和泉町
大和屋 是業

此度いなか大工浄留璃のちに「かむろのしよさミ事——」二やくよしさだよし——」二はんめ小山田にてよしさだと」見ちがへられいろことかうまい——」まことにめいじんひるきハ大和屋

上上吉 中村座 六百両
大谷廣右衛門
まつしま町
駿河屋 情風

此度ふちべいがの守にて「おし出ししはらくのうけ」手づよく二ばんめたひ人すがた」にてのちにいがの守となのる」までまづ大入にてとうどり」さんまんぞく——

上上吉 市村座 六百両
(替紋)

沢村宗十良
(定紋)

さかい丁新道
しろきや 酌子

かほミせ新田よし貞にて「上るりの所作きれい——」小山田太郎にてせつふくのば」大あたり——当座一のひやう」ばん重疊——

上上吉 中村座 七百両

(替紋)

山下金作

(定紋)

ふきや町
天王寺屋 鯉缸

当時江戸女がたの達人此度」楠の妻菊水にて正行にみらいき」をゆづらるゝ所しつかりとして」よし第二ばんめ杉本がいだき」たる実子にちをあたふるまゝ」ならぬしうたんそてをぬら」きぬものハなし近年の」大出来——

上上吉 中村座 六百五十両

(替紋)

岩井半四良

(定紋)

さかい町新道
大和屋 杜若

当かほみせ小山田が女ほうにて」いなかむすめの所作つゝ井つゝのきり」かふろといひやまとやとつり」あいよくにくらいしいほどひやう」ばんよく二やくこうとうの」ないしけいせいすがたの出よし——

上上吉 森田座 四百五十両

(替紋)

小佐川常世

(定紋)

ふきや町
わたや 巨撰

近年だん——ひやうよく今度」上るりのばいなかむすめよし」しはらくの引立ハ皆うけ」とりました兄の切腹をとゞめ兄」弟しうたん大出来——ニはんめひやう」しまひ見事——

上上吉 市村座 四百五十両

(替紋)

佐野川市松

(定紋)

ふきや町
新万屋 盛府

此たびわきや次郎にて直義」時景がともづるになわかけん」とするときに出兩人を」いひつめるまでよいぞ」——

上上吉 市村座 四百両

(替紋)

瀬川乙女

(定紋)

ふきや町
路考同宅 如考

ひさ——にてくだられ」ひやうばんよく重疊」——とうちやくおそく初日」まにあわずざんねん」はるをまちます

上上吉 市村座 六百五十両

(替紋)

瀬川菊之丞

(定紋)

ふき屋町
濱村屋 路考

今度こうとうのないしにて」訥子へれんぼ十町とりもちの」ばいかううけとりました」二やくおやまだが妹ミちしばにて錦江」丈といろ事うまい事——今の」若女がたのまれものじやと」ミな人いひわた——

上上吉 森田座 六百両

(替紋)

中村里好

(定紋)

さかい町しんみち
さかい屋

此度しばかり女ぼうにて浄留りの」ば恋のとりもちまためづ」らしいしはらくの女がたの」ひつたておほねをりのば」二やく岩せのまへ第二ばんめきつね」の所作まできついこうしや」去年からひやうばんよくめでたし——

上上吉 市村座 四百両

(替紋)

尾上多見蔵

(定紋)

ふきや町
新音羽屋 幸朝

此たび大とうのミヤやつ」しすがた二やく小山田」が女ぼうにてじがいする」まで出来ました

上上 中村座 四百両

(替紋)

中村久米次良

(定紋)

さかい町
天王寺や 里蝶

しきたへにてうしの」時まいりのちにけいせい」となりよしさだとの」ぬれよし——

上上 中村座 三百五十両

(替紋)

瀬川吉次

(定紋)

さかい町新道
はませや 露川

当かほミせ大とうの」ミヤの侍女さして」しうちなしだん——」とりつしんあれかし

右之外追々出板仕候